



年頭のご挨拶

平 井 秀 輝*

令和7年の年頭にあたり、謹んで新年のご挨拶を申し上げます。皆様方におかれましては健やかに新年をお迎えのこととお喜び申し上げます。

さて、皆様御存知のように昨年12月、吉越洋元会長がご逝去されました。大ダム会議会長としての御功績に改めて心から感謝申し上げます。また、昨年末には、足立敏之議員がご逝去されました。近年の議員の御活動によりダム業界が大きく躍動していることに心からの感謝を申し上げたいと思います。ここに、お二方の御冥福をお祈りしたいと思います。本記事の都合上、略儀な記載となったことを合わせてお詫びいたします。

次に、皆様に御礼を述べなければなりません。旧年6月開催の第12回EADC（東アジア地域ダム会議）では、お蔭様で予想を上回る参加者や多くの国からの参加（331名15ヶ国）を得ることができました。また、多くの海外参加者から会議運営のすばらしさにお褒めの言葉をいくつもいただきました。参加者間での情報共有や意見交換は貴重な成果であったことは言うまでもありませんが、参加者の方々にチーム JCOLD のおもてなしの精神が伝わったことも大きな成果かと思えます。日本大ダム会議（以下、当会議）にとって、このような大規模な国際会議の主催は容易ではありませんでしたが、2年にも及ぶ綿密な準備、開催中の皆様の臨機の対応、そして何より関係者皆様の堅固なチームワークにより無事に執り行えましたこと、改めて多くの皆様のご尽力とご協力に心から感謝申し上げます。

昨年は元日の能登半島地震に始まり、南海トラフ地震臨時情報の発表、前線性の降雨や台風による山形県、石川県などでの浸水被害など数多くの自然災害が発生した1年でした。そのような中、ダムは7月豪雨や台風第10号などの大規模出水でも事前放流や洪水調節により確実に流域の被害軽減に努めました。中でも皆様と共有しておきたいダム情報が石川県管理の小屋ダムです。ご存じのとおり能登半島地方につきましては、昨年元旦に震度7の地震に襲われたのに加え、被災地の復旧・復興途上のわずか9ヶ月後に大水害にも見舞われてしまいました。能登半島地震では、多くのインフラが被災する中、小屋ダムが震源域からわずか10数kmに位置し、震度6強を経験しながらも天端舗装のクラックの損傷などにとどまり、堤体の安全性を損なうような被害はありませんでした。一方で、能登半島豪雨に

* 一般社団法人日本大ダム会議 会長

際しては、既往最高貯水位を記録しながら、2山の洪水をいずれもピークカットする洪水調節を行い、下流の水位を低減しました。まさに、宮沢賢治の言葉を借りれば『大地震ニモマケズ 西カラ線状降水帯ガ来レバ洪水ヲ貯メテヤリ』という状況でありました。このような小屋ダムに見られる日本のダムの安全技術や洪水防御技術が世界から注目されています。

現在、世界のダムの関心は Dam Safety(ダム安全)です。気候変動に伴う近年の降雨量の増大と激甚化により、2020年 USA, 2021年中国, ブラジル, 2023年インド, リビアなど、近年、毎年のようにダムの決壊が続いています。

そんな折開催された昨年9月のインド年次例会ですが、ダム安全対策の一環として、ICOLD LIST OF INTERNATIONAL DAM EXPERTS の作成の取り組みの報告がありました。ICOLD が技術者認証して、ダム技術に関わる独立の技術委員会の委員選定のためのリストを作成し、事故調査、あるいは途上国でのダム新設や再開発の委員会の委員の選定をしようとするもので、本例会にて制度検討のための特別委員会の設立が承認されたところです。一方で、本例会では、ダムアップグレードについても関心事になっていました。シンポジウムの三大サブテーマの一つが「ダムの再開発と改良」でありました。また、世界第3位の約6,000基の大ダムを有する開催国インドからは、気候変動対応、堆砂の課題、再生可能エネルギーの導入に対応する貯水池容量の増大の必要、揚水発電所の運用管理や既存ダムの再生プロジェクトの対応の報告がありましたが、これらはまさに日本が先行して取り組んでいるダム再生の課題であり、日本の関心事が世界の関心事になりつつあることを実感しました。例会中、角哲也 ICOLD 副総裁が議長を務める APG 会議（アジア太平洋地域会議）では、日本がダム再生にかかる議論を主導すべく、ダムアップグレードについて3S、すなわち「Safety」「Smart Use」「Sustainability」の3つのSによる方向性を示し、この視点で世界の情報を集約し、情報交換し、推進することを提唱したところです。

現下、国内では、気候変動への適応、カーボンニュートラルへの対応のため、治水機能強化と水力発電促進を両立させるハイブリッドダムの取り組みが進められています。アンサンブル降雨予測の精度向上による既設ダムの治水・利水の運用高度化の推進に合わせ、旺盛な発電需要への対応として既設ダムへの発電施設の新増設などが進められるとともに、松原ダム・下笠ダムでは揚水発電の増強検討も始まりました。これらは世界に誇る3Sの代表プロジェクトであります。当会議としましても「ダムの効用増大および流域環境向上のためのダム再開発事例分科会」における検討などを通じ、3Sが世界のダムアップグレードの合言葉となるべく本年も活動を行って参りたいと思います。

本年は ICOLD 第28回大会及び第93回年次例会が5月16~23日に中国、成都で開催されます。大会では「気候変動に対応するダムと貯水池」「次世代に適合するダムと堤防」「極端水文事象時のダムと堤防の安全」「ダムの地

震時の性能と安全」の4つの課題、年次例会国際シンポジウムでは「共通の課題、未来の共有とより良いダムへ」のテーマの下、多くの技術セッション、全体会議、パネルディスカッションが予定されています。総裁選、日本のダムを視察するポストツアー、Innovation Award 2025への日本の応募などもあり、話題に事欠きません。また、中国は世界第1位の約24,000基にも及ぶ大ダムを有することから、ダム再生についての情報や、太陽光発電等の再生可能エネルギーと水力発電を組み合わせたプロジェクト情報など、日本のダム政策に大変有意義な情報も得られそうです。多くの皆様の積極的なご参加をお願い致します。

最後に、昨年、日本大ダム会議若手技術者フォーラム（JCOLD-YPF）が設立され、勉強会も始まりました。当会議としましても、本年もあらゆる側面から若手技術者を支援していきたいと考えています。是非、皆様におかれましても、本年も国際会議への参加などへの若手技術者の積極的な支援をよろしくお願い致します。

以上、本年もダムに関する話題に事欠かない年となりそうですが、引き続き当会議へのご支援、ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げ、年頭のご挨拶とさせていただきます。